

## 特集の最後に

國 友 一 史 (徳島県医師会生涯教育委員会)

産婦人科医師、小児科医師の減少、救急医療体制の崩壊が社会問題化しているが、実際には内科や外科の医師数も減少してきている。内科・外科医師は比較的数量が多いためまだ目立たないが、日本外科学会は昨年、新規入会者が数年後にはゼロになるとの見通しを公表した。厚生労働省は医師の偏在と表現するが、日本の医師の数は先進国では最低ラインであり、医師の絶対数が少ないところへ新しい臨床研修制度が発足しここ2-3年間実働医師数が増えなくなったため絶対数不足が顕在化したのが最も大きな原因となっている。このような状況の中で、現代医学の根幹を支える基礎医学を研究する医師の数も大きく減少している。日本生化学会が2007年1月に公表したアンケート調査結果でも大学医学部基礎医学研究室に在籍する大学院生は平均2.7名、そのうち医師免許を持つのはわずか0.9名、研究室の60%には医師免許を持

つ大学院生がいないのが現状であり、MD., PhD はもはや絶滅危惧種であるとまで言われている。

この特集では大学・研究機関および臨床医両者の観点から基礎医学研究の現状を考え、今後基礎医学に携わる若い研究者をいかに支援し活性化していくかを主にご執筆いただいた。諸外国との研究組織構築の違い、研究資金や研究者の待遇等の違い等々の指摘があり、また米国でのポストク研究者に相当する大学の臨床講座の大学院生が減少していることが医学部基礎医学教室の研究医の減少につながっているとの指摘もあった。しかし、つまるところ医学研究には「夢」や「知的好奇心」を持つことが重要であることには変わりはなく、それを持ち続けるために大学や医師会が協力し、研究者の待遇の改善等に支援をしていくことが必要であると考えられる。